染崎延房

臺灣外記

明治七年

國性爺が恢復の傳ハ。戲場でも善く看まれども。僅ゝハ
樓門紅流〳〵の二幕のみふく。當時さ〳〵詰之介の。役廻り
もい誰も知らず。余ども渠が數回の忠戰遂ハ臺灣ハ名
を殘せ〳〵迫の。其全傳ハ至りて。婦幼の耳ハ觸るもの
罕あり。即今我が兵彼地ハ攻〳〵。野蠻殘膚懲るハ
及び始め〳〵臺灣より。島ゝを知る輩ハ又ならん。
夫等が者ハ鄭成功の。頗る日本魂ひゝる。略傳をもん綴
りまして臺灣外記もい題する支ちり。

明治七稔長月吉旦

戲墨堂主人記

A609

48-7635

父ハ支那の大豪傑母ハ我朝の一娼妓身ハ松浦潟平戸ハ生る一朝朱明の恩恵を被り為ハ忠憤を発してより更ハ清國の粟を食ハ常ハ雙手ハ日本刀を揮りて数万の敵を悩せり遂ハ臺灣の孤島ハ據り負を守る既ハ三世頗る楠氏の義烈ハ似たり

鄭成功が臺灣の事迹ハ大抵此策子ハ盡
しゝ方今我が兵彼島を進擊ふその
事ハおゐてハ鄉尙ハ田代幹夫子と議りその
確說を參考して臺灣軍記と題し
小冊を編集ス既て幾冗ハ及へり今
此策子を閲して後件の軍記を讀ゆゝ臺
灣全島の事件ハ柱てハ一目下ハ〻判然
るべし

臺灣外記

東京　淡崎延房輯

傳聞く臺灣ハ支那の東南ハ位して凡四十里許の
所ハ一大嶋ハ〻長さ南北九十八九里東西ハ
廣き所僅ニハ三十余里ハ位るべく地の形ち海上ハ
弓を浮べ如しといふ最も僻遠の孤島なれバ昔古
ハ支那の内地より行通ふ考もなく明の世の
末ハ俄カリ鄭成功と言へる人明の衰へ〻我恢復る

さんと此島に據て兵を練り屢清と抗戰に及び一
紀原を尋ぬるに既に前に述るが如く此臺灣は僻地
なれ住む人とても多くは逃るに明の萬曆年間南
海の海賊にて顏振泉といへる者我が九州の遺民
を率ひ始めて此島に來りて自ら嶋の首領と
稱し專ら土地を開墾なすと雖も傍海賊を事とせ
ず其頃泉州安南縣の人にして鄭芝龍と喚る
者あり鄭芝龍は鄭成功の父なり此人頗る才ありて万夫不

當の英勇なれば壯年の時より知日本に渡り劍道を
熟練し後南蠻に趣き其頃支那人の知らざる所
の火術の奥旨を習得め躯て海賊顏振泉が黨中
に加りしに顏振泉死して後遂に鄭芝龍を
代りて臺灣嶋の首領となるに渠が威勢いかばかり
顏振泉に弥增せば專ら海上を縱横なれば官兵
敢て捕ふる支能はず仍て官にては我が懷け聞
の總兵遊擊なり余が近傍の海賊なれば芝龍

が旗を船に立ねべ往来する度慨はざるやへ年々
賊船一艘より三千金の税を取り此税連年計
算すれば幾万金なるを知らず終に基隆の地を
去つて泉州安平鎮に城を築き兵卒許多城中
に置けども芝龍自ら給を與へて官より物を受
る度々然るに明の十三世萬曆帝と所へ〳〵へ國
の傾く時みづからけん宴楽をのみ事〳〵國の
政事を顧ず是を諫る忠臣に罪を得て退けら

れ奸臣に時を得さいよ〳〵奢侈を勧むる故に官
庫に積る金銀は日々夜々に減ずれば國々の年
貢を増て民の膏を絞るゆへ恨み怨む動らも
ぞ茲に韃靼國といへば支那國の北に隣りて地方
もつとも廣大なり近年明の政道乱れ國中の民
苦しむに堪ず脱出て韃靼へ行く者多し此時韃
靼の大王は名を奴児哈と喚て天の縱せる聖
智にして徳をもつて人を懐け常に明國を窺ふて

征せん支を圖り居るゞ時いくりぬと飲びく明
の萬曆四十六年ハ韃靼ハち國の名を大清
と号しつゝ貝勒王と云ふ者を軍師として三百万
の大軍を起して稍中國へ攻入る威勢破竹
の如くなれバ明兵防ぐ支を得ず漸次ハ諸城を
攻落して遂ハ清河と云ふ所の城まで輙く乘取り
り是ゝ軍師貝勒王ゞ軍事ハ賢きのゝ為ふ向
ふ所の國々ハ士卒の乱妨狼藉を禁め專ら仁慈

を施せしゝバ明の苛政ハ苦しむ人民慈母ハ逢
ひゝる心地して皆髮を剃り了髻をもり清朝の
天子万々歳と祝して帰伏為るけり尓程ハ萬
曆帝ハ清兵襲来ありと聞くより防禦の兵
を都より追々出しゝるど何世の兵も討負
て清河城まて乘取られしとの注進頻りもゝ
りバ驚く支限りなく奈何ハせんと議せられしハ
或人鄭芝龍ゞ智勇を賞して勧むる者のありし故

帝泉州ハ人を走せて猛可ハ渠を召ゆるまで芝龍
ハ義氣ある丈夫なれ忽ち三千の兵を引て一万余里
の行程を僅ハ両月あらずして都ハ登りうしうバ
帝芝龍ハ官をさづけて清の師を征せしむ仍て芝
龍ハ命を奉じ官軍数十万を率ひて遼しりゆ地へ
進幾せり然るハ今稔萬曆四十八年七月ハ帝俄ハ崩ぜり
れ八月太子位ハ即て年号を泰昌と改め民の貢
を緩まれつ専ら仁恵を施させ給ハ惜いるハ泰昌

帝まも引續きて崩じゆ在位僅ハ三十日とぞ仍て
太子位ハ即け翌年正月年號を天啓とあん改
めり今世ど天啓帝ハ先帝ハ似もゆゆ奸臣魏忠
賢等を愛して政道正しからざれバ人ハ眉を顰め
しとぞ然バまた鄭芝龍ハ遼の地ハ到りくより敵く
清兵と戰ひを挑まず朝廷よりして預りし若干の
用金を軍民ハ分與へ大水を引て濠を深くし石
を畳で垣を高くし専ら軍事の調練をあして芝

追柔弱の民〻〻幾程もなく精兵しもつて城を
堅固ふ守りつゝ敵の退屈せるふ至りて只一戦ふ討ゞ
きんと甚虚を窺ひ居〻〻ふ貝勒王もさる者ゆゑ猥
りふ兵を動さぬ期てはる夏既ふもや一年計ふ及
びしゝバ朝廷ふてハ芝龍の所置を因循ものゝと沙汰
せられゝ袁應泰といへる者を代りとして遼ふ遣ハ
し芝龍を都ふ召還されしふ人或ハ芝龍の所置を
大いふ誉る者ありゝ帝まゝ〻心迷ひゝ又芝龍

をバ遣ハされぬ是より先ふ袁應泰ハ遼の地ふ趣
きてより芝龍ゞ政事を改めゝ猥りふ法度を寛め
しゝバ士卒等民家を乱妨しゝ婦女を奸淫ふとせ
し程ふ遼の地大いふ乱れゝ此虚ふ乗じゝ貝勒王
ハ謀略を設けつゝ猛可ふ兵を向る夏ゆゑ袁應泰
ハ戰ひ負ゝ是迫芝龍ゞ心を盡してきしる堅固
ふ構へる瀋陽といふ名城も忽ち清兵ふ乗取られ
ぬ然バまゝ鄭芝龍ハ再び命を蒙りゝ彼の遼の地

ふ至りて見るに瀋陽の地は悉く清兵の巣穴となり
百姓胡の衣服に変じ頭を剃りて形状は嚮に見
うしし姿にあらねば涙を流して歎息せしが先此
うへは方略をもつて暴の恥辱を雪がんと南蛮倭
習の火薬をば地に伏せる支元十五里斯なして鄭
芝龍は瀋陽城にあり寄せつて敵を計りて囲引
ようせかの地雷火を發しられば一時に清兵二十万人
麼ふは為うける然るに黄寧と言へる城よりは明の

大将張鳴鶴とりふ人二万ふ足らぬ兵をもて是を守
りて居る事四へ鄭芝龍はいかゝして是に新兵を加
へんとまつ我王化貞とりへる者ども我禁めて從はぜ
倘し敵兵彼所を襲ひ此遼東の城よりして應援ふ
及ぶんふは怖るゝ支のなりしとかいふそ是非なく其儘さ
し置しふ果して清の貝勒王は黄寧の兵敗き我知
り不意に大軍をあつ向けて輙く城を落しうり此
時王化貞ふ於ても兵十万を引具してうも我援けん

と為れども却つて敵の方畧に陥りて躬方多く
損じ遂に芝龍も俱に兵を出せども落城の跡なれ
ば奈何とも詮術なく再び恥を雪がんとて遼東の城
に退きしに此度都に听へしに奸臣魏忠賢の輩が
芝龍王化負遠東に居ながら黄寧の兵を見殺しに
せし其罪重かれば死に當るとて速に刑に処せんと辞を捕
へて奏せしに帝いたせば是ありとして忽ち二人を召
還し獄に入て獄舎に法がれし此芝龍は長崎にて

明の賓祚に傾き我功いまだ成らずして彭の如くに
獄に繋がる是重かれば天命なり然れども年来兵法を
学び西洋南蠻の火攻に熟せ今我誅せらるに於ては
此法長く絶果なん仍て一書を著して弟鴻達是豹
等に付へ護國の要に為べしとて自ら指を噛き
りて流る血を筆に染て十巻の書を認りしを
題して経國雄略と号せり其頃帝は女色に耽り余
る道人より得し処の海狗腎丸とふ薬を用ふ一

夜ふ数十婦を御まれども房中陽痿の患ひまし〜然
るふ道士ハ都を去つゝ其行く所を知らざるふ其藥ぜ
盡んとも仍て典藥医官の輩海狗腎丸の号ふりて
本草を考へ見るふ海狗とりふハ是ふ号ふ腽肭獸なる
旨を知るべきいまゞ其状を知らぬ然るふ芝龍ハ東の方
蝦夷の境ひふ船を浮め腽肭獸を蝦夷人が獵る我
見ようと言ふ旨を知る者ハ〜奏せ〜ハ帝大いふ
歓びゝ忽ち芝龍が罪を赦し急ぎ日本へ趣きゝ

腽肭獸を得て帰るべしと許多の金を渡ふて芝龍
ハ不思議ふ命を助かり我が泉州の木城ふ到り二人の
弟鴻達ふ芝豹ふ仔細を語りゝ日本ふも度門ふ所より
商人船ふ便船ふ日本寛永二年の秋肥前の長
崎ふ着せ〜が芝龍ハ既ふ思ふ我遼東ふ所
りしかも黄寧の城を援け得ざるハ止を得ざるを支
ふ我よくゝ死まで誅せんとも今房中の藥を得人と
て又我が罪を赦まふと人の命を弄ぶ斷の如きの

不明の君ふ仕へ〳〵何の益あらん乱を避る如ハ
すゝとて姑く此地ふ止まりて丸山の遊君を購ひ出
し〳〵妻とせ〳〵ど長崎ふハ明の商舩常ふ来船ふ
き事ゆへ爰ふ住らんハ面仆あり幸ひふ妻の親田
川原なる者ハ同國平戸ふ住まるゞ故ふとゝまるふ便
り〳〵平戸ふいゝり名を一貫と改めて南蠻流の
外医を業とし世をいと安く送るうち妻ゞ腹ふ
男子我故け名を鄭森しハ喚びしるり今ハ

明の都ふハ彼の魏忠賢暴威を震ひて已ゞ心ふ
合ずるハ切なるをも罰せしうハ今朝廷ふ仕る者
ハ佞臣なるふぬハ稀なりしふ天啓八年八月下旬帝
俄ふ崩じけるハ皇弟信王位ふ即けり然るふ新
帝聖智逞しく前朝の政事ハ咸亡國の兆あり
して忽ちと改正なしもふ権勢強りし
魏忠賢ゞ罪を数へ〳〵其徒数十人と共ふとれを
刑し天下ふ大赦を行ふ是ゞ四民大いふ歓びく

末頼母しく思ひける實や此帝即位の後僅に三
四ヶ月にて姦臣悉く誅せられ外に勝れる功臣
も多く偏に帝の英断なりしぞ由次の年正月に年
号を崇禎と改めいよ〳〵仁政を施せしが明の傾く
天運なりけん諸國に強盗蜂起せし所が中に
も李自成といへる智勇勝れし曲者にて西蜀の地
に楯籠り遂に諸國の群盗を己が手下となせし
うば其勢凡六百方人大將廿四人にて咸李自成を

押尊まてらせ殘闖王と崇むるぞ此勢ひにて
都に責入り天子殘虐し大業を畢るべしと思
ふぞ手下の諸將を四方に分て諸國を乱妨し
つゝも漸次に都へ近付けり亦北京の都には傷に
清の大敵有るに又李自成が強大なる威勢當り匝
ければ帝大いに苦慮せられて屠討隊を向
ても咸李自成に討破られ遂に崇禎十七年三月
十八日に至り賊軍都に乱入して王城を攻落せ

しうハ憐むべし帝ハい宮後の山ハ趣きて自ら
滅び給ひぬ實や明朝三百年の榮花の夢も一
時ハ覚く禁闕賊の巣穴となりまち變じしう
哀しといふも余り餘り茲ハ吳三桂といふ人ハ清の
師を防ぐんと三十万の兵を率へ遼東の地ハ至り
しハ李自成ガ乱ゆゑ都へ召されゝふより軍勢
を引きゐ北京きして登らんとせしハ畿内ハ賊
軍充満してこれを遮り止むるハぞ三桂進む夏

を得ぬ甚うち都ハ賊ハ取らるゝて帝も崩じ給ふ
と聞き駭く哀限りなく此上ハ京師ハ押入り君
の怨を報いんと決死の評議を為すしうぞ此大
変を聞くよりも三十万の軍兵も散ぐハ為り
行て残るハ一万ハ過ぎれバ三桂遺憾ハ堪ゑて率
ハ檄文を飛しつゝ諸候伯より兵を募れど何せも
賊威ハ恐怖して吳三桂ハ力を合せぬ爰ハ至り
て三桂ハ是非なく清の陣ハ到り國難の旨趣

を告知し適き寛大の仁恕を施し微臣ふ力を添ら
れし明國の讐を討ちめるべ大恩永く忘るゝ事なし血涙
を流して請ひけるふ清の掎政王なる者此虚ふ乗じて
中國を併呑あさんと思ふぞ貝勒王と相議して渠が
望ふ任せて自ら百万余の兵を率へ彼三桂を先隊と
して直ちふ北京へ攻登りしふ三桂ハ一筋ふ君主の讐を
報ぜんと死力を盡して傷ましうば賊軍最も強なりと
雖も此鋒先ふ争う敵せん遂ふ王城を攻落さば彼

李自成も勢ひ滅しく湖州ふ迫逃るゝ
茲ふて撃れんとするん仍て清の掎政王ハ手を
濡さずして北京を静め自ら大清皇帝と
称し年号を順治と改め偖吳三桂を遼東ふ
復して平西伯ふ封ぜしうば三桂も今更ふ國を
清朝ふ奪へしと思へしも又時至
らハ廻復を計る事も至らんと其動静を窺
ひけり夫ハ偖も鄭芝龍ハ久しく肥前の長

嘗て聞きしより明帝亡ひうと聞き迫かに快
らぬが妻子を倶して古郷に帰り弟鴻達と
豹と共に安平城を守り居るに奚に明の高
祖より九世に當る皇孫に唐王と唱へる人
今清に世を去りぬ在りし頃聞くに
国より義氣ある芝龍に明の廻使を計らん
と南閩の諸臣と談判中なり福州天興府
と言へる所に冊まく皇帝の位に即け年号

を隆武と改め兵器粮米をべくこれに安平城よ
り送りしかば隆武帝は鄭芝龍が忠肝義胆
ひ
ひ
ざ
ざ
銭欲に支限りなく此芝龍が子
鄭森はさわ才にすぐれけるが身の丈六尺八九
寸の大象をも挫くべく殊に日本に生まれ故
頗る侠魂ひ
ひ
帝大いにふ
ふ
ち
ち
銭愛して宮中
にて元服をさせめ成功と字して帝の姓を賜
ひて朱成功と呼びかせり其國姓を賜よ

故ふ人こゝろ景を崇て國姓爺とぞ称しける
此時群臣兵を出して清を征せんと勧むれど
帝も頗るその意なり然るに芝龍ハ禁めて言
ふやう今清賊の躰を見るに向ふ所天下ふ敵ふ
く且仁をもて士民を恵めば征しがたの國患
なり陛下位ふ即ひて軍民の心定まらぬ内
爭ふ遠く師を出さん仁を行ひ徳を治めて
時の至るを俟ふ恢復の時節至るべしと辞

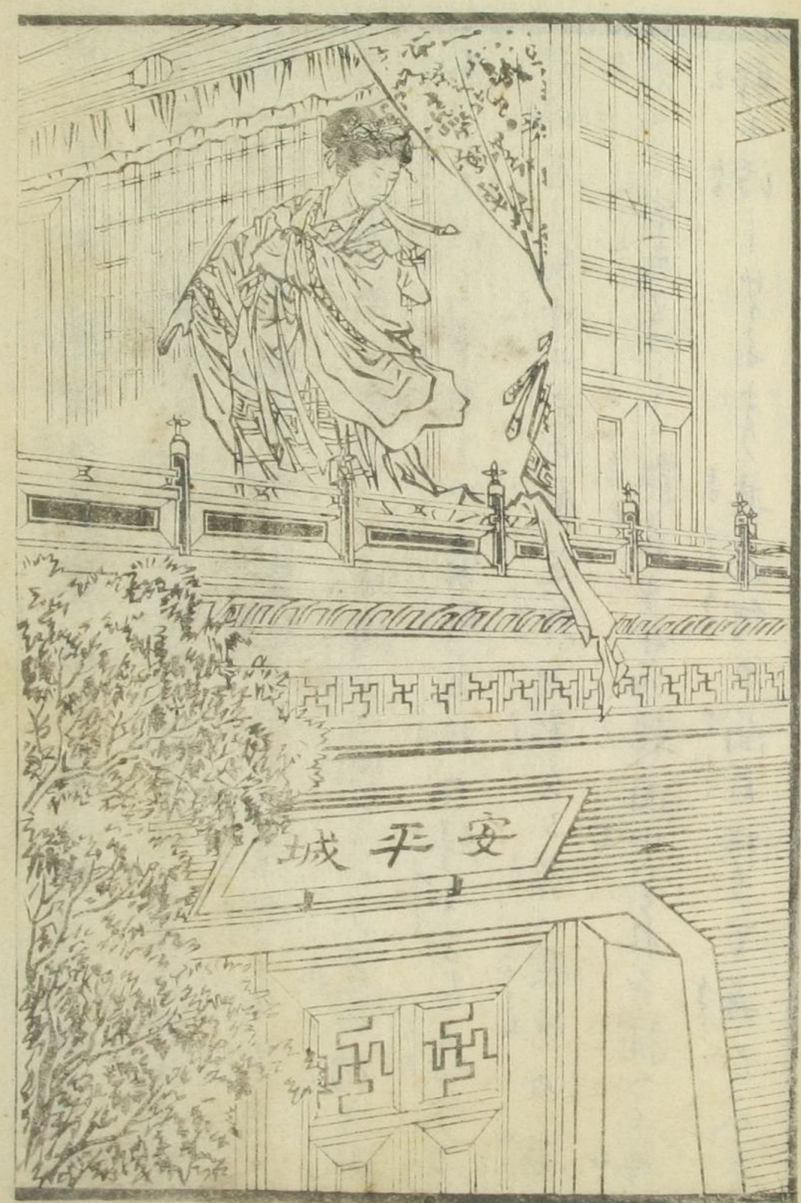
を盡して諫めしかど群臣のうち芝龍をバ謗せ
る者などなりしかバ帝窃ふ鄭芝龍を疎む
氣色の露ハるゝふぞ芝龍も快しとせず折ふ
泉州へ海賊来りて安平城を侵せり其吟
へなりしかバ今我が城の陷らバ兵粮の道絶
ぬべしと芝龍ハ其旨奏聞して成功等を引
倶して泉州へおん退けり爰ふ至りて帝ふハ自
ら兵を率へ剣津とふ所迫遂ふ師を出

せ　ふ果して清兵襲ひ来り　猛威ふ群臣
戰へ怖れて咸めけ　ふ落失せ　りバ帝も
慶を落れしが敵の追兵嚴しく逼り　
ふく討せ　りしとぞ　ホバ清の貝勒王ハ智勇勝
せ　軍師故諸州残らず討従へしが只泉州
のみ芝龍が一族安平城を固く守れバカをいて
動り　亘しと駈て一計を廻らし　つ豫て芝龍
と交り深き必昌ふ者を芝龍の許へ遣ハ

て清の皇帝鄭芝龍の兵名を聞せらき何卒面
を見まく欲く仍て三有王ふ封じ招ふるの趣
き綸記せ　処の勅書を渡し　尚懇ろふ利害を
説くふぞ此時芝龍ハ奈何して心の動きふる
やらん歓然として領承あ　一族どもを恣々
と支の仔細を言ひ听うまれバ何せも大いふ駭
きて是必ず貝勒王が詐謀なる支疑ひあ　決
して思ひ止まり　と辞を揃へて練めり

芝龍ハ首をうち掉て我清帝の招きに應し
たとへ過ちなれハとて跡ハ彰朱成功ハ一族
老黨とれを佐けて安平城を守らんに何の怖
る〻事なんぞ我が心既に決せり必ず禁むる事
ふうきと言ひて准備に及ぶ成功ハ尚躊躇
して涙と俱に禁めしかど芝龍ハ聞ずして振切
て五百騎ばかりの兵を從へ敵の陣へと趣けバ貝
勒王ハ豫てより思ひ設けし事なれハ歡然として

出迎へ自ら芝龍が手を取て一室の裏に伴ひて
爵を折て誓ひ酒を酌む事三日三夜芝龍が甚
く醉しに乘じ忽ちに鐵縛めて北京へ送り遣ひ
更に韓國山といふ者に數十万の兵を與へて安平城
に向ハせしかハ程なく成功等ハ父が行る其跡に
て奈何ならんと氣遣ふ所へかの敵陣へ趣きて
る五百の從兵脫き飯りて箇樣〻と告知ふぞ扱て
方略に陷りぬ何とせんと一族老黨周章大て


安平城

樓上より自殺して逝く龍が妻甚の敵軍の膳を冷さむ

あらさる所へ韓固山が大軍の不意に起つて攻寄せ
ゝせば遁ぐ鄭家の一族も思ひがけなく支なる故須臾が
程に防げども敵軍既に乗込られば又奈何とも詮術
なく船に飛乗りさんぐに皆海上へ脱出ぬ是に仍て敵
兵は安平城を乗取りて家財を掠め婦女子を奪へる
乱妨甚しく中に かの鄭芝龍が妻なる者は長崎の遊
君なく容色もつしも艶麗なせば韓固山はこれを捕へて寵
幸に汚しけるより其妻何の面目ありて再び人に

見へんと城の樓に駐りて咽を刎て河
水に飛入り死しぬるぞ清の衆兵これを見て實
や婦人の勇決は婦女にも斯の如しとて舌を吐て
驚けり然ば又成功は母を船に助け乗せんと彼所
這所と尋ぬる此形状を見るにつけても憤りに堪ぬ
母の屍の腹を割き固山の為に汚されし臓を引出して
濯清めて元に納め葬して墓を造り成功父に從
ふうちに更に軍事に預らず常に傷服を身にまとひ

〻書籍ハ眼を肆し居るが父ハ獻の虜となり母
ハ非命ハ死せしらべ忽ち慷慨激烈しく義兵を起さん
と欲を畫り馳て孔子の廟ハ詣で着まる所の儒服
を焚て姑くとせ戎拜謝しつ是より軍裝を身ハよ
そひ一同舩ふうち乗りて厦門とらへる嶋ハ渡り爰ハ
要害を構へて明を思ふと言ふ心ある此島の名を
思明と改め專ら恢復の准備せり茲ハ明の神宗皇
帝の嫡孫ハ永明王といへる廣西とらふ地の旧臣

等此君を立て位ハ即しめ年号を永曆と改め文
武の百官を定もるとて成功是戎傳へ聞て急ぎ廣
西ハ趣くのぞ永曆帝ハ群臣大いハ力
を得て廻復の支を委任せり是ハ仍て成功ハ先廣
東戎伐從へて清の師を退けんと一回思明ハ立飯り
叔父の芝豹ハ彼島を守らせ更ハ十余万の兵を率へ
廣東の地の要害なる大星城とらへるハ對ひて只一
戰ハとせ戎乗取り又廣東の南洋島ハ無双の要

地あるが故に是を躬方の物とせば廣東一路を恢復すべしと勸むる者のありしかば成功實に此島に渡り只一晝夜に政取りつゝ是より漳州に進発するに這処に安海城といへるハ父芝龍の築ける城にもつとも堅固の要害なりしを今ハ清兵に奪ハれ大將王老虎といへる者此城を守るをもて成功等ハ憤りに堪ぎ只ひと揉に踏崩さんと勢ひ込で攻蒐るに此城に柳嚴力士曾横神

兵と称ひらるゝ両人の勇士ありて頻りに寄手を悩ます程に力責に八たゝ画して成功諸口に兵を伏て援兵の路を絶ち海口に一軍を屯して兵粮運入を遮らせしかば城中糧の盡るより忽ち内乱生じつゝ曾横柳嚴の両勇士不思議に命を殞せしに其虚に乗じ成功が兵を進めて攻しかば遂に此城落去せり斬の如くの勢ひなれバ漳州本府の清兵等も聞怖てて逃走り故手を濡さゞして漳

州を既に恢復せ〜程に夫より近傍の嶋々も大くハ
討平らげて所々に軍兵を別ち置き成功二万の兵を
倶〜に思明の本城に凱陣せり是に於て永曆帝
に感じつとも斜ならず勅使を思明に遣はされて
成功に爵を晋めせられ延平郡王と号し尚も恢復
を図ら む時に朝万治元年明の永曆十二年清の順治十九年あり余
程に成功ハ斬る勅諚を被るるハ遷延せ〜ば支な
らぜ先此上ハ大舉して金陵を陷せ以て南京を恢

復せ〜と総勢九十七万人数艘の軍船に打乗つ
数百里の波濤を凌ぎ〜遂に南京の海口に攻登
り或ハ火攻或ハ水攻種々の奇計をめぐらして崇明
鎮江の二城を攻取り此威勢に乗じつ稍南京に
攻寄せ〜当所第一の要害なる石頭城に馳向ひし
も堅固に守衛る一の廓を討破り二三の門も乗通
りて敵兵許多撃取りしかば残卒ハ遂に應天府に
る本城に逃入り〜是に於て成功の猛威ハ竹を割

が如く今ハ一舉ニ京城を恢復ふとんと進ミし折
ら北京の援兵二十万騎此日到着ス〳〵つゝ戚功の
軍勢の背ニ襲ひかゝるあそ城兵られ力を得て本
城よりも二十万の又援兵を繰出し押捕ゝて攻蒐
れハ戚功が強兵と前後ニ大軍を引受てハ又奈何
とも詮術なく余とも臆ら氣色なく死力を盡し
て戰ふ程ニ敵將ハ〳〵討取ゝるゝ躰方の兵士
も多く討ゝ〳〵遂ニ大敗ニ及びしゝハ戚功是非な

く殘兵を率ヒ又軍船ニうち乘りつゝ思明の本城ニ
退きける此頃既ニ永曆帝ゝ清兵ニ逼らせゝ南
寧の地へ為ニとゝ其所へ行ハ戚功大ニ
驚きて直ちに兵士をきゝ向ふれど帝の行衛知ら
ざる故歎き哀む其所へ清の猛將韃固山數百の
軍船ニ大軍を乘らゝ〳〵の襲ひ來る頃進ハ固山
ハ毋の讐なれば戚功大ニ憤激〳〵海軍ニ得〳〵兵
士を選ゝ謀畧を授けつゝ彼數百艘の敵船を南蠻

傳授の火術をもて攻撃ふなん為うるぞ是より清
兵大に怖れ来りて竈を者も皆紅毛の通
支るを某と言へる者臺灣の加比丹を怒める支の
ものをもて駆て思明に来りつて成功に言へるやう彼
臺灣は地廣くして最も要害堅固なる故も松
家の旧領なる埔蘭人これ桟領せり君速に兵を
發して彼地をあん手に入れなと利害を説て勧む
るにぞ成功現もとうち領き親ら三千二百人の精

兵を引率して水路を臺灣に渡海し島の蘭人
胆を潰して天より兵の下りしかと和蘭陽人千余人
に土人数千人城に籠りて頻りに防ぎ戦へり尓ば此
臺灣の赤嵌城と呼へる石を畳み土を煉てその
高き十余丈厚き丈余の塹をもて最も堅固に構へ
事ゆへ成功らも攻めども城堅くして砲を受ても仍
て成功土人に就て城の形勢を探索まるに城外に
高山ありて夫より漲り落る水城中に流れ入て飲

料ハ做るのミ城中外ハ井戸等と言へハ成功士卒ハ
下知して山の水源を塞ぎしハ城中忽ち水切れ
る故蘭人勢ひ窮まりけん巨艦十余艘ハらち乗り
て更ハ戦ひを決せんとせ成功の兵小舟ハ乗りて大
いハこれと奮戦ス遂ハ敵船の鋭砲窓より兵士等
おの〳〵攻入りて蘭兵六百人を殺し五艘の船を奪ひ
取り餘ハ火を放ちて焼ハ其火城中ハ及ぶこと
まれべ加比丹遂ハ逃出て一ツの堡ハ籠りて仍て

成功使を送りて此地ハ父の旧領なへ今我これを復せ
んとせむも珍寶家財の類ひハ我り需むる所ハ下の
らもと悉く遣ハしてしハ加比丹忽ち降伏せ
故是を木國ハ帰らしめ基灣と言へる地名を東寧
と改めて赤嵌城を承天府として成功ハ居をハ
めて専ら仁政を旋そめぞ民歓人で心服せり其
次の年永暦帝ハ清軍ハ逼られて緬と言へる所
ハおの〳〵崩じ世とい世の東寧ハ吁へしハ

成功大いに憤慨して是より疾を發して幾程もなく卒去せり時に三十九才とぞ其子經と與に父に
ふおとらぬ膽略ありて頗る士民の心を得たり是より
先清朝にては父成功の時より書を贈りて招きしかど成功更に從はず今また經も書を遣はして
屢これを招けども終に從はず尚永曆の年号を用ひて專ら恢復を畫るゆゑ清兵數襲ひ來れど
輙く擊て追ひ卻け自ら兵を出してハ閩廣

諸州を攻取りしが此東寧の主なる支十九年にして
卒去しつ其子克塽業を嗣しかども幼弱なるが故
に一族これが政事を執りて父祖の時に似ず清兵
此虛を測りつゝ大軍をもて襲ひしかば遂に抗戰
する支能はずして降伏に及ぶゆゑ清帝聽て克塽を漢
軍公に封じけり成功義兵を起してより茲に至り
て三十八年明の正朔遂に盡しハ又惜むべき事に
なん清帝既にいへる支ごとく成功ハ明室の遺臣にか

らぞ乱臣賊子ハ伐らむと糸も伺りぬべき義士あり
けり時ハ天和三年今より百九十二年前の事ありしぞ

東京本町
岡田文助
加藤兵吉

臺灣外記 大尾

官許明治七年十二月廿五日
永保堂藏板
東京本町三丁目 岡田文助
同上橋九屋町 加藤兵吉
書肆

010190518960

嘉祐四年
正月
隨筆
隨筆
二